

地獄について

—— 禅の場合も考慮して ——

光 地 英 学

一

因果業報思想は、仏教思想の特質の一である。輪廻と因果業報思想は、相互に密接な関連があり、元来、古ウパニシャットにて始めてみられるものである。釈尊業説の中心は、各自が道徳的に行爲の責任を持ち、更に行爲によって各自の性格が形成せられるところにあるとみられる。いうところの業は、われわれの身口意における善悪無記の一切のわざ、並にその勢力である。善悪の業は、必ず苦樂の果報を将来する。この業力によって受ける果報であるから業報という。善業報と対蹠的なものは悪業報である。来世の悪業報について考えられるものに地獄がある。

二

極樂浄土と地獄は、死後の未来觀の両極をなしている。い

地獄について (光 地)

うところの地獄とは、劇苦を受ける世界という意である。それは悟界迷界を總該している十界、並びに迷界の三惡道・四惡趣・五趣・六道の最下界に位し、十惡・五逆・謗法等衆生の自ら造作した惡業に依つて、死後、墮つべき地下の牢獄をいう。墮獄のものは、筆舌に尽くせない程の大劇苦を受ける。しかも自ら造作した罪報であるから、壽命が尽きることもない。己が罪業の尽きるまで、長時の極苦は継続される。

かかる地獄に就いては、經論により多少の異同がある、が概ね次くである。衆生を焰熱を以て苦しめる八熱地獄(等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間)。寒水を以て苦しめる八寒地獄(頰部陀・尼刺部陀・頰嘶吒・瞞々婆・虎々婆・喞鉢羅・鉢特摩・摩訶鉢特摩)。この八熱八寒の大地獄に各々属する小地獄である十六遊増地獄(又は大六増、一々の地獄の四面に門があり、門毎に四獄があり、合して十六となる)。従つて八の大地獄と小の二二八地獄で、都

合一三六地獄となる。大地獄に対して小地獄は、大地獄の受苦にてなお業報未断のものが入るところであるとされていゝる。その他八炎地獄（又は八炎熱地獄）十八地獄、孤地獄（又は独地獄）辺地獄等。このような地獄に關した思想は、極樂思想とは異なり、殆んど仏教各宗にみられる。殊に天台、更には浄土教にて尠からぬ重要性を示している。

元來、地獄思想は西紀前三千年頃からチグリ、ユーフラテス河流域で栄えたシュメール族の信仰中に発し、印度にては、その影響ともみられる後期ヴェーダ文献に看取されうるとする学説もある⁽³⁾。地獄思想に就いてのものを見るに、当思想を散説している仏教経論は決して尠くない。そのうち当思想に關説することの比較的顯著なもので、私の拜見し得た経論を列挙すれば、略々次の如くである。長阿含經卷第十九地獄品。中阿含經卷第十二天使經。增一阿含經卷第三六、八難品。法句經。正法念處經卷第五より卷第十五に及ぶ地獄品。觀仏三昧海經卷第五。罪業応報教化地獄經。起世經（闍那崛多訳）卷第二より卷第四に至る地獄品。同経異訳の起世因本經（達摩笈多訳）卷第二より卷第四に至る地獄品。六趣輪廻經。諸法集要經卷第七地獄品。因縁増護經。俱舍論卷第十一分別世品。瑜伽師地論卷第四本地分中有尋有伺等三地など。古來、地獄を明示し強調した点、最も強烈な印象を跡づけているのは、蓋し惠信僧都の名著「往生要集」であろう。実

に「往生要集」こそは、ダンテの「神曲」と共に、地獄・極樂（ダンテにては天国）思想の双壁であるといつてよいと思われる。

いうところの「往生要集」卷上一、厭離穢土には、大智度論・瑜伽論・俱舍論・觀仏三昧海經、就中、正法念處經に抛り前記の如き八大地獄（八熱地獄）が説かれている。そのうち最も苦惱の輕微な等活地獄の位置は、この世界の大地の表面から一千由旬の底であり、広さは縦横一万由旬であるといふ。当地獄から阿鼻地獄（無間地獄）に至るまで、輕から重へ、上層の位置から下層の位置へと次第を追つて説述している、が最下層の所に在る阿鼻地獄に至つて、苦惱も極まるというのである。その説述は八大地獄から、十六眷屬別処（十六遊増地獄）に及んでいる。

往生要集を以て代表される地獄は、現世のことではなくして、来世におけることである。来世に重大関心を払う浄土教の基本姿勢は、地獄に墮ちることを厭い、浄土に往生することを欣求するにある。極力墮在することを嫌う浄土教者は、如何なるものが地獄に墮在するのであるとなしていたのであろうか。そのことを一考してみる。この際、上掲「往生要集」並びにその撰者源信僧都は、わが国浄土教の先驅を為すものであることは、贅言の要もない。

支那唐代の善導大師は、「般舟讚」(総讚宗要)に「不_レ畏_二三塗_一造_二衆罪_一、破_二滅三宝_一、永沈淪。不_レ孝_二父母_一、罵_二眷屬_一、地獄安_レ身無_二出期_一」^③という。父母に不孝である、従つてそのことは眷屬にも背くことであるが、そのようなことを中心とした諸罪を犯したり、仏法を破壊したりするものは、地獄に墮するとの謂である。次に同じく唐代の弘法寺迦才法師に就いてみる。その「浄土論」巻上に、「涅槃經」(北本卷第三十三、南本卷第三十二)により次の如く云っている。「(前略) 一_一悪業感_レ報、報不_レ可_レ数。一_一報中、受_レ苦万端、則苦不_レ可_レ数。如_レ此等若(苦)、皆由_二無智、不_レ用_二善知識語_一、常處_二地獄_一。過去已受、現在今受、未來当_レ受。未_レ有_二息時_一。」すなわち無智にして善知識の語を用いず、悪業造作の故を以て、地獄に墮落し種々の苦を受けるというのである。

それではわが国専修念仏の創唱者である法然上人に就いてはどうであるか。「何様にも物をあらそう事は、ゆめゆめ候まじ。若はそしり、もしは信ぜざらん者をば、久く地獄にありて、又地獄へ帰るべきものと能々心得てこはがらずしてこしらうべきにて候。」^④(法然上人伝記卷第三上) これは上人の、津戸三郎に対する教示であるが、人を誹謗したり、信じたりしようとしぬ人は、過去世未來世共に地獄有縁のものに他

ならないとの意である。これに対し念仏を中心として、「凡此念仏は、信ずる者は極樂に生じて永劫に樂果を証し、謗ずる漢は地獄に墮して長時に苦惱をうく。」(拾遺古徳伝絵卷第四)これは東大寺にて、上人が興福寺や東大寺の学生達をも含め、大衆に説法せられた折の言葉である、が念仏誹謗のものを以て、墮地獄のものであると断じている。^⑤そのことはかの「無量寿經」巻上、第十八願の「唯除_二五逆誹謗正法_一」に該当することである。上人関係文献で、地獄に關説されているものは、割合に尠く、ただ上掲のものに過ぎないように思われる。要するに上人にては、誹謗(特に念仏誹謗者)不信(特に念仏不信者)のものが、墮地獄者に該当するといふのである。

法然上人と比較して、資の親鸞聖人の場合、地獄に關した語が幾分多く看取されうる。次にそれらのものを列挙してみよう。「辺地往生をとぐるひと、つゝには地獄におつべしといふこと(後略)」「(歎異抄第十七)」「(前略)ただし念仏のひと、ひがごとをまふしさうらは、その身ひとりこそ地獄にもおち、天魔ともなりさふらはめ、よろづの念仏者のとがになるべしとはおぼえずさふらふ。」(御消息集第四)「こゝろよりやまひをするひとは天魔ともなり、地獄にもおつることにてさふらふべし。」(前同第五)「(前略)もしこのこと慈信にまうしながら、そらごとをもまうしかくして、人にもをしへた

ること候はゞ、三宝を本として、三界の諸天・善神・四海の竜神八部、閻魔王界の神祇冥道の罰を親鸞が身にことごとくかぶり候べし」（血脈文集第二）「衆生有礙のさとりにて、無碍の仏智をうたがへば、會婆羅頻陀羅地獄にて、多劫衆苦にしづむなり。」（浄土和讃）「念仏誹謗の有情は、阿鼻地獄に墮在して、八万劫中大苦惱、ひまなくうくとぞときたまふ。」（「正像末和讃」「三時讃」）「本願毀滅のともがらは、生盲闡提となづけたり、大地微塵劫をへて、ながく三塗にしづむなり。」（「高僧和讃」「善導讃」）なお「執持鈔」第二には、正師源空と共ならば、地獄へ墮ちても差支えないという、師への絶対随順性の上に地獄を説いている。

これらには地獄・阿鼻地獄・閻魔王界・會婆羅頻陀羅地獄・三塗等の語が出ている。何れも親鸞聖人の地獄に関する云わば直接的なものである。これに対し間接的なものとしては、次の如きがある。「教行信燈」信卷（本）引用の「聞持記」の割註、殊には同「信卷」末引用の「涅槃經」の文。「真仏土卷」真仏土釈「涅槃經」（北本三三三）の文。「化身土卷」（本）聖道釈引用の「末法燈明記」の文。「同卷」末外教釈引用の

「月蔵經」「薬師經」の文。高田専修寺所蔵、親鸞聖人真蹟断簡の中の文。これらには何れも地獄の語が用いられている。又上記の如く地獄の異名も用いられている。しかし地獄それ自体に就いて、委細に渉る説明が為されているのではな

い。総じて聖人地獄觀の特色は、(一)師法然上人の思想信仰を繼承している点、(二)地獄の極苦を受ける因としての罪悪性を、自ら反省する上に地獄を考えている点のあること、(三)正師法然と共ならば、地獄へ往っても厭われないという絶対随順性からして、地獄を以て厭うべきものではあるが、飽迄避けられるものでもないという点の、三点であるように思われる。

上記諸師の墮獄の要因は、夫々次の如く纏め得ることが出来る。善導大師にては、不孝・犯罪者・破佛法者。迦才師にては、悪業造作人。法然上人にては、誹謗人（特に念仏誹謗者）不信者。親鸞聖人にては、念仏者にして虚言するもの、心病者つまり煩惱熾盛者、仏智疑惑者、念仏誹謗者、本願毀滅者ということになる。要之、諸師における墮獄者は、十悪五逆・誹法者であるということにしぼりうる。それと共に、これら浄土教諸師の地獄は、単なる觀念上のものではなくして、客觀的他方世界のものであるということも留意されねばならない。

四

それでは禅の場合はどうであろうか、浄土教に就いては、親鸞に至る迄の考察であった如く、禅にても道元に至る迄に限定したい。さてかの百丈懷海禅師は、「如何是心解脱、及一切处解脱」の問に対し、次の如く答えている。「不_レ求_レ仏、

不_レ求_レ法、不_レ求_レ僧、乃至不_レ求_レ福智知解等。垢淨情尽、亦不_レ守_レ此無求_レ為_レ是。亦不_レ住_レ尽_レ處。亦不_レ忻_レ天堂畏_レ地獄。縛脱無礙、即身心及一切_レ名_レ解脱。」(百丈広録)これによれば地獄を畏れないという。このことを側面からみたならば、畏怖と否とに拘わらず、地獄なるものを肯定していることになる。更に弟子である黄檗希運禪師に至っては、次の如く明確に地獄が肯認されている。「平日只管瞞_レ人。争知道_レ今日自瞞_レ了_レ也。阿鼻地獄中、決定放_レ儼不_レ得。」(伝心法要)宛陵録)黄檗の資、臨濟義玄禪師も亦、地獄思想を認容している。すなわち「一生虚過也道、我出家。被_レ他問_レ著佛法、便即杜_レ口無_レ詞。眼似_レ漆突、口如_レ偏担。如_レ此之類、逢_レ弥勒出世、移_レ置他方世界、寄_レ地獄_レ受苦。」(臨濟録)百丈・黄檗・臨濟は、上掲の文に関する限り、何れも欺瞞的な言動にて終始したものの陥るべき地獄、そしてそのような地獄は、他方世界つまり心外の地獄であることを容認しているものとなしうる。

禅にはこのような心外の地獄に対し、心内の地獄思想がある。居士の李留後端愿が、師の達観禪師に「地獄畢竟是有是無」と問うたのに対し、達観師の答えは、地獄を以て客観界に外在視せず、自心中に在るものとなしているのがそれである。すなわち「答曰、諸仏向_レ無中_レ説_レ有、眼見_レ空華。太尉就_レ有中_レ覓_レ無、手擅_レ水月。堪_レ笑眼前見_レ牢獄、不_レ過_レ心外

見_レ天堂_レ欲_レ生。殊不_レ知、欣怖在_レ心善惡成_レ境。太尉但了_レ自心_レ自然無_レ惑。」(石門林間録卷下) いう如く欣怖は心に在る、天堂地獄を以て心中に求めんとしている。かかる心内の地獄観を更に強化しているのは大慧宗杲師である。「天堂地獄不_レ在_レ別_レ處。只在_レ当人半惺半覺、未_レ下_レ牀時方寸中。」(大慧書) 卷上、答_レ張提刑)

次に道元禪師はどうであろうか。「典座教訓」に「我若生_レ地獄・餓鬼・畜生・修羅等之趣、又生_レ自余之八難_レ處、雖_レ有_レ求_レ僧力之覆身、手自不_レ可_レ作_レ供養_レ三宝之淨食。」という。三宝供養物を調理し得る典座の職を、特に意義づけんが為にも、四惡趣・八難_レ處に生を稟けなかつたことを悦ぶ、その意味で地獄の实在性を肯定している。しかしそれだけにまたその肯認性は、尠からず微弱であると云ってよい。同じく「永平大清規」中「対大己法」として、六十二法が挙げられている。その第二に次の如く示されている。「不_レ得_レ通肩被_レ袈裟。經曰、比丘対_レ仏僧及上座、不_レ得_レ通肩被_レ袈裟。死入_レ鉄鉀地獄。」ここには墮獄のことが指摘されている、がしかしそれは単に經文引証を以て警誡しているに過ぎない。この点矢張、前文と同じく心外他在の地獄の肯認性は消極的であるといわねばならない。

禅の地獄思想に関する文献資料は、如上の如くにも極めて乏しい。しかし数少ない資料からみた禅の地獄思想は、その

限りにおいて心外にみるのと、心内にみるのとの二類型があるものとされうる。心内の地獄は、煩惱障そのものをいう。これに対し心外他在の地獄は、煩惱悪業の結果墮在すべき世界である。心内にせよ心外にせよ、地獄を認めている点は同一である。ただ実在のものともみるか否かである。

五

実在の地獄の容認は、心内の地獄をも肯認する余地がある、しかし心内の地獄のみの容認は、必ずしも心外の地獄を肯定しない。いう如く禅の地獄には、心内心外両者の思想がある。浄土教の場合、それが純乎たる浄土教である限り、心外実在の地獄でなければならぬ点、いうまでもないことである。

かの「大乘起信論」（第三解積分、分別発趣道相）は「虚空無辺故世界無辺。」と示している。経論上の数多い地獄思想に対して信じうるならば、その信は地獄の実在性へのそれへとつらなるものであらう。

- 1 「俱舍論」卷第十一分別世品にては、十六増地獄は八熱地獄にのみ付すとある。
- 2 岩本 裕教授「極楽と地獄」(三一新書 492) 一六三頁～一六四頁。
- 3 法然上人伝(十卷伝) 卷第四、津戸三郎入浄土門之事には、

概ね同趣旨の文がみられる。すなわち「何様ニモ物諍事努力候マジ。若謗信ズザラン物、久ク地獄在、又地獄へ帰ベキ物ト、能々心得、後還誘ベキニテ候。」

4 念仏誹謗者の墮獄については、なお次の如くみられうる。黒谷源空上人伝(十六門記) 第十一殿下教命造書門に、「縦人有て念仏を誹謗すとも驚べきにあらず、末法濁世の罪人の定れる習なり。来報に定て阿鼻地獄にあらん。」西方指南抄卷下一五、実秀に答うる書に、「おほよそこの念仏は、そしれるものは地獄におちて、五劫苦をうくることきわまりなし。」

5 涅槃経(北本一〇〇)(北本二七)(北本三三) 阿闍世王が、父頻婆沙羅王を弑逆したことを悔過し、帰仏するに至る文。

6 「経にのたまはく、もし人多罪をつくれば応に地獄中に墮すべし、わずかに弥陀名号をきけば、猛火清涼となる。」(「浄土」収載、大原性実博士「親鸞聖人と浄土」六、親鸞聖人と地獄) 但、私は当真蹟断簡は未見。